第２章 地域支援プロジェクトにおける実践教育の展開

1. 高齢者へのライフヒストリーワーク実践

（1）目的

今年度から高齢者へのライフヒストリーワーク実践として，地域高齢者と関わりながら面接調査を行うという，認知症予防とケアに資する「私のアルバム」作成を行いました。「私のアルバム」とは，霧島市の支えあいプラン 2015 の基本目標のひとつで，高齢になっても「地域で暮らし続けることができる仕組みづくり・サービスの充実」に資する，認知症ケアパスの普及・活用に位置づけられる施策です。

2010 年から「**私のアルバムーやがてのためにー**」と題された冊子を霧島市の地域包括支援センターが中心となって作成しました。その冊子に込められた意味とは，認知症になって介護が必要になったときでも，自分らしい生き方を諦めてしまうのではなく，自分らしく暮らし続けるための自分の人生や思いを書き綴って，介護が必要となったときに支援に関わる人や施設に提供し，その人の人生や思いを最後まで大事にして関わってもらうことを目的としています。

今年度は 11 月 7 日，8 日の 2 日間，霧島市いきいき国分交流センターと霧島市にある「今日館デイサービス」にて，現地実習として事前学習と面接調査を実施いたしました。大学院 1 年次の 12 名と教員 1 名が参加し，市役所や事業者協議会，施設スタッフの皆様と一緒に地域にお住まいの高齢者と交流しました。

また，本プロジェクトは，臨床心理学研究科の授業科目である「エスノグラフィック心理臨床論」におけるアウトリーチ臨床活動の場として連携させて実践しました。大学院生の臨床調査訓練として，専門職として高齢者福祉に関心を深めていくなかで，地域高齢者に対して面接し，アウトリーチ臨床活動としての基礎や面接調査におけるコミュニケーションや観察スキルについて学び，ライフヒストリーワークの成果物としての「私のアルバム」とその知見を地域に還元することを目的としています。

大学院生による聞き取り場面

グループワークを踏まえた事前学習

（2）実践の流れ

①事前学習

11 月 7 日，講師に黒岩尚文さん（霧島市小規模多機能ホーム連絡会・理事）をお迎えし，以下の内容についてグループワークを踏まえた事前学習が行われました。

・霧島市のすこやか支えあいプランの概要と目的の理解を深める。
・実践された「私のアルバム」作成 VTR を使用し，作成の手続きと使用目的について学習する。
・高齢者面接に臨む上での心構えを身につける。
・自分の死生観や老いへの感性を高める。

黒岩さんによる事前学習の様子

この指導の中では，黒岩さんの活動がビデオで紹介され，鹿児島県の小さな離島での支援や認知症になっても楽しむことを諦めないことを実践した支援について語られて，大学院生たちの心に強く残ったようです。

また並行して，10 月から大学院の授業においても予備学習をスタートしており，自分史・ライフヒストリーワークの目的と展開，リサーチクエスチョンの立て方やデータ記録の方法，個人情報および倫理的配慮について学習を進めていきました。

②面接調査の実施

11 月 8 日，霧島市のデイサービスにて，面接調査と交流会を持ちました。地域高齢者 8 名（面接対象者），面接時間約 40 ～ 50 分，デイサービス利用者の高齢者など，総勢 12 名の地域高齢者の方と歓談しながら食事を共にして交流することができました。

地域の高齢者・利用者との交流会の様子

③事後学習

面接調査終了後から 12 月にかけて，授業において下記の内容で事後学習を行いました。

・面接項目における内容や構成の検討
・インタビューの方法とスキルについての振り返り
・データの整理と管理のあり方

そのうえで，2 コマ分の授業を使って「私のアルバム」作成の経過と結果を発表，手法の適切性と改善点について検討し，地域高齢者と関わることによって，自分自身の気づきや見方の変化を振り返り，全体ディスカッションを行いました。その様子を DVD に収録して，作成した「私のアルバム」とともに，霧島市・黒岩さんへ実践に関するフィードバックを行いました。

来年度も，霧島市と連携して本プロジェクトを継続することになりました。

地域高齢者との交流と大学院生同士での振り返り

（3）大学院生の感想

・本人さんにとっても，家族にとっても，生きてきた歴史が記録として残ることは，とても大切だと思うし，「認知症だから」で，諦めてしまわないことを学べました。
・認知症や生活状況の変化等で，生活機能が低下している高齢者に対する，支援のあり方，方向性を学ぶことができて，とても参考になりました。対象者や利用者の残存機能や人的リソースをアセスメントし，加えて，その人の生活史から現在の生活の連続性（生き様）をアセスメントした上で，それらをベースに，失った能力を補う形で，一人一人の生活と支援をデザインしていくことが大切だと感じた。
・高齢者の方の人生をつなぐための私のアルバムというもので，インタビューでの話の聞き方，インタビュー者の態度など，勉強になりました。

2. 就学相談会における心理検査の実践教育

地域支援活動として，大学院生が就学相談の現場で検査者となり，対象児童への心理検査を行ってきました。これまで，信頼性・妥当性のある心理検査実施の習得に向けた取り組みとして，オンデマンド教育，ロールプレイの拡充などの取り組みに力を入れてきました。これまで培ってきた実践教育方法を活かし，本年度も 6 名の大学院生が実際に心理検査を行いました。地域の教育関係・福祉関係のスタッフからの評価も高く，一定の成果を収めております。

本年度はさらに，昨年度までの大学院生へのアンケート結果からの反省を活かし，事後学習の充実を図りました。これまでの学習内容では不十分であると考えられた，検査結果からの対象児の特徴理解，現場で活用されやすい検査所見の作成方法についての指導を行いました。検査所見のフォーマットを作成し，そこに盛り込まれるべき情報について整理し，事後学習の中で大学院生に提示しました。また，実際に作成された所見については，プロジェクトスタッフによる複数回の添削を行いました。また，検査結果について地域の専門職に伝えるカンファレンスの場も設定し，スタッフのフォローの元，大学院生自身の言葉で多職種に結果を伝達する体験も持つことが出来ました。これらの学習体験により，より実践的な検査結果の理解や，多職種に伝えてゆくための表現方法などの視点が明らかになり，学習意欲の向上や自身の向上に繋がっていったようです。

今後も継続し，地域の専門家との繋がりを活かしながら，大学院生の実務教育と支援活動の可能性を模索していきたいと考えています。

実践教育の流れ

事前学習
- 検査の基礎知識の習得
- 就学相談システムの学習
- 検査のロールプレイの実施

↓

就学相談会対象児童への実践
田中ビネーＶ知能検査実施

↓

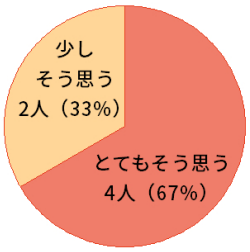
事後学習
- 採点と IQ 算出方法の確認
- 子どもの見立ての整理
- スタッフによる所見の添削

所見作成・提出

↓

就学相談会
- カンファレンスでの検査結果のフィードバック
- 保護者との面接への同席

事前学習の様子



心理検査や支援に対して
イメージを持つことができましたか？
（大学院生）